

ペダルを踏み込まないと前に進まないような道でしたが、雨の日も風の日も休まずに、とにかく一生懸命に働きました。

昭和二十五年には、幸いにも群馬大学芸学部に入學しましたが、一年時は桐生市内にあった同大学の工学部で、履修科目の単位が取れたので、家から三十分ぐらいの所を歩いて通いました。二年時以降は、前橋市にあった本校に通学しなければならず、母にあまり負担を掛けたくないで、朝食は自分で米を研ぎ炊飯してみそ汁を作り、それを食べて七時十五分の電車に乗り、五十分かかって前橋に通いました。自分ながらよく頑張ったものと思っています。

卒業後は教職の道を選び、約三十三年間桐生市に居を構えて、その道一筋に精進しました。弟、妹たちもそれぞれに安定した生活を送ることができて、平和で幸福な人生を過ごしています。

戦前から戦後、そして現在を生き抜いてきた者として、もう戦争はこりごりです。一日も早く、明るく楽しく生活のし易い平和な世の中になってほしいと願う

ばかりです。

激変の北朝鮮で

東京都 林 耕蔵

国際電気通信（株）に入社

明治生まれの父母は、大正十二（一九二三）年九月一日の関東大震災により日本橋で被災した。父は関西に旅行中で、母一人では、四人の子供を連れて逃げるのが精いっぱい、金品を持ち出す余裕などは全然無かった。親類に身を寄せたが、後に郊外の杉並で洋服店を開いた。

世の中は次第に軍国主義の時代となり、食糧、衣類などは配給切符制となり、国策で個人商店などは整理または集約されて、廃業に追い込まれてしまった。軍需産業優先は更に進んだが、父母は年令のせいもあり時流に乗れず、適齢期になった子供たちは兵隊へ取られるなどで、生活には苦勞をしていた。家には病人も

いたので、私は子供なりに生活の大変さが分かった。

私は、昭和十三年の年に末っ子として生まれ、父母の寵愛を受けて育ったが、母は高校卒業を控えた私に對して、知り合いから給費制度のある国策会社「国際電気通信（株）」を聞いてきて、私にそこに入ること勧めた。そして試験を受け入社した。

当時、その会社は世界最新の通信方式の施設を有していたが、施設の拡張による技術者の不足が深刻化して、技術者の養成が緊急の課題となっていた。養成機関として、愛知県碧海郡依佐美村（現在は刈谷市）にある送信所内に、講習所予科を設置していた。

送信所は昭和四（一九二九）年に完成し、二百五十メートルの長波無線アンテナの鉄塔八基と、短波無線の鉄塔があり、対欧州通信発祥の地でもあった。ドイツ風建築の本館が寮となり、講堂を教室として全員が入寮した。授業は朝の座禅で始まり、夜の正座で終わる。教科は国語、数学、電気通信術、農作業、軍事教練などスパルタ式の重点特訓授業で、一年間で中学卒業程度の学力となる。

ここを修了して更に本科に入る。本科は東京都北多摩郡神代村（現在の調布市）にあって、中学卒業の採用者と一緒になり寮生活をして、専門学校程度の高等数学、有線無線通信工学、実験などを習得した。当時、一般の中学生、大学生は軍需工場などに勤労働員され勉強もままならず、また繰り上げ卒業で軍隊に入隊する状況だったが、その点では幸いなことに我々は勉強一筋に励むことができた。しかし戦局の進展から社員の入隊も多くなり、現場の技術者不足が慢性化してきたので、その対策として私たちが繰り上げ卒業で補うこととなった。

日・鮮・満の通信路に

昭和十九年十月下旬、朝鮮の平壤（ピョンヤン）中継所への赴任が決まった。もうそのころは、戦局が重大な局面を迎えていた。サイパン・グアムの両島は玉砕し、日本本土もB29爆撃機の跳梁下にあつて、「本土決戦」「二億玉砕」などと叫ばれていた。一方朝鮮半島では、中国の成都を発したB29爆撃機が偵察飛行をする程度で、戦局ひっ迫の気配は感じなかった。

朝鮮海峡は、米國潜水艦の横行で関釜連絡船はジグザグ航行で危険な状況だった。一方、この海峡には東京（中野）から新京（現在の長春）を結ぶ約三千キロメートルに及ぶ世界最長の通信路があり、松前重義博士らの研究開発による純國産技術で完成した、無装荷ケーブル搬送方式による市外回線が通っていた。この方式は一對の心線で、音声一回線（チャンネル）と搬送（変復調による多重化）六回線の計七回線が得られる。当時から、チャンネルという言葉が使われていたのだった。

平壤中継所は、京城（ソウル）、釜山プサンに次ぐ主要装置（変復調装置があり市外回線を構成）のある局所で、敷地約千二百坪の土地にコンクリート建六十坪の局舎があった。機械室は、縦横一メートル四方のガラス窓が縦横三列に並び、アトリエのように明るく、床にはリノリウムが敷かれていた。トイレは内地の局所では水洗だったが、ここは冬期には零下二〇度を越えるので水洗ではなかったが、ベチカが二基もあった。また、家族のための社宅と二階建ての独身寮が完

備していて、車庫にはダットサントラックが鎮座していた。

朝鮮海峡直通無線

仕事にも慣れた昭和二十年五月下旬、朝鮮海峡を直通で結ぶ超短波無線工事のために、釜山中継所岩南無線分室に出張することになった。この海峡通信は、海をまたぐこともあって、ルートでは最も弱点のある区間で、杓岐、対島と島伝いに、海底ケーブルと超短波無線の二つのルートで結ばれていた。戦局の進展により不測の事態が生ずることから、全市外の電信、電話回線が不通になることを想定して、この工事が計画された。九州側は、福岡と佐賀の県境にそびえる背振山（標高一、〇五五メートル）、朝鮮側は釜山の北三〇キロメートルにある大白山系の先端に位置する元曉山（標高九二二メートル）で、無線距離では二三五キロメートルであった。「見越し外通信」で、既に四年前に実験済みの通信方式であった。釜山の岩南無線分室では、会社の技術陣営が開発した「携帯型超短波多重装置（神代号）」の調整が続けられていた。「神代号」

の名称は、研究所が神代村にあったことから名付けられたとのことだった。

八月の初め、竣工間近い元暁山に行くこととなり、釜山からバスに乗り梁山へ向かった。ここには建設事務所がある。そこから更に、炎天下の田舎道を約四キロメートルほど歩いてふもとに着く。ここからは、獣道のような細い道となり、三時間ほど歩くと頂上に着く。途中、草木の茂る急斜面でこの工事を応援していた兵隊が、遅れている通信と電力用の電柱の建柱作業をしていたが、二十四坪の木造局舎と二十メートルのアンテナ用の木柱は完成していた。ここでの仕事は、ふもとに次々と到着する大量の蓄電池や電力用機器、測定器などの機器類を、近隣の部落から雇った現地住民にチゲ（運搬具）に背負わせて、局舎まで運搬させることだった。この作業は電灯も無く、夜になると「ヌクテー」と呼ばれていた朝鮮狼の不気味な鳴き声があり、元暁大師の創建といわれる元暁庵に泊まっていた。

元暁山山頂で終戦

山頂は多少の起伏はあるものの広々としていて真っ黒な土が印象的だった。景色も良くて、釜山方面が見えた。また、このころになると米軍機による釜山港内にある船舶や、その沿岸地帯への爆撃も多くなり、しばしば煙が上がるのが見られた。しかし、戦争への実感は少なく、パノラマを覗いているような感じだった。八月十五日を開通予定日として工事を進めていたが、両局は線表に従い、あらゆる困難を排除しながら工事を進めた結果、予定日まで完成させることができた。

十五日の朝を迎え、全員開通の整備に忙殺された。ただ、開通にあたって気になることがあった。六月の下旬ごろ、福岡地区に大空襲があつて、背振山局のエンジンが被害を受けたというのを、風の便りに聞いていたことである。九時ごろより電波の送信を続けていたが、やはり背振山局からの応答は無かった。交信が不成功となり途方に暮れていたが、正午前、釜山中継所から「重大放送があるからラジオを聞くように」

との連絡があった。正午になり全員がラジオの前に集まり天皇陛下の放送を聞いたが、雑音と難解な言葉でよく分からなかったが、どうやら戦争に負けた、戦いが終わったということのようだった。

このあと会社の指示に従って無線局をそのままに放置して、山を降り釜山に戻った。市内は独立の喜びで沸きかえり、赤旗や大極旗が揚げられて異様な熱気に包まれていた。数日を釜山で過ごしていたら、今度は原局へ戻れとの指示が出て切符を買ひ、朝鮮人で超満員の列車に乗る。車内は、何やら大声のハングル語が飛び交っていて騒然としていた。多くの日本人がいち早く日本内地へ帰らんとしている中を、逆に半島を数百キロメートルも縦断して北上することになった。この結果、激変期の一年間を平壤で送ることになり、様々な体験をすることになった。

ソ連の参戦

八月九日、ソ連が参戦し、空陸から満州の全域と朝鮮東北部への攻撃を開始した。また、海上からは太平洋艦隊が、雄基、羅津、清津へ上陸した。

一方、関東軍は、かねてからソ連の参戦に備えて満州防衛線と、トクシ 囚們、新京（長春）、大連を結ぶ三角地带に定め移動配備をしていた。司令部も新京から通化へ、また満州国皇帝も前後を警備兵で守られた列車で新京から通化を経由し、満州と朝鮮の国境を流れる鴨緑江を一六〇キロメートルも上流の臨江を経て、更に奥地の大聖子に移った。

八月十一日、新京では軍人軍属の家族を乗せた疎開列車が出発、続いて満鉄家族、一般人を乗せた列車が次々と鴨緑江を渡り南下して、朝鮮に向かった。その一部は幸いにも南朝鮮に達したが、ソ連軍の急進出で、京城と新義州を結ぶ鉄道は、三八度線で分断されて閉鎖した。そのため数万人说われる疎開者は、沿線の市町村で下車し、そこで生活をせざるを得なくなった。悲劇の始まりである。

平壤市街も、一時数千の人々で溢れて大混乱をした。これといった収容施設も無く、多くの人々は鉄道の官舎やお寺、学校、遊郭などに収容されたが、晝一晝に二、三人という超過密状態であった。食糧の配

給、防疫体制も無い状況で、食べ物や衛生環境は急速に悪化し、月日がたつにつれて、コレラ、発疹チフスなどの伝染病がまん延した。人々の体には、虱がたかり放題となった。帰国の時期も定まらず、夏着姿のままの避難民は零下二〇度にもなる厳冬を迎えて、数千人が亡くなる事態となった。一転して難民と化した。

一方、従来から平壤で生活していた在住民もそれぞれ我が家を接収されて、一軒に二、三世帯が住む状況となり、売り食い生活も底をつき物価も上がり、食べていくことが大変な苦勞になった。多くの人は、日本人会の斡旋で働くこととなった。私もその一人であった。

ソ連軍の進駐

八月二十四日、ソ連軍先遣隊のカメンシュコフ少将一行が、空路入壊した。翌二十五日には、ソ連軍の第一極東方面軍第二十五軍の本隊が入壊したが、戦闘地域から来たために、着ている軍服は汗と油にまみれ、よれよれであり、軍靴は破れ、腕には入れ墨、坊主頭の者もいて、囚人部隊と言われモンゴル系人が多かつ

た。上衣はルバシカ風に革バンド、ズボンに乗馬ズボンに似た物を履いていた。銃は七十二連発の自動小銃で、肩にかけて持っていた。俗にマンドリンと言われた銃である。靴下は履いてなく、布を足に巻きつけていた。靴下がないからではなく、朝鮮では包足、ソ連ではパルチャンキとかいい、昔からの風俗であった。

八月二十五日には、空港内で日ソ両軍の首脳による会談が行われた。この会談で通訳をした人の話では、終戦から武装解除に至るまでの一連の動きについての会談が行われたとのことであった。平壤に集められた約三万人の日本軍の武装解除は、翌日事故無く完了した。

また二十六日夜、感興から空路入壊した、チヌチャコフ司令官は、空港で朝鮮民衆の大歓迎を受け、挨拶をしてから車で鉄道ホテルに向かったが、その沿道は旗で埋まり、車には花束が投げ込まれて、人々は「マシセイ！」「マンセイ！」と歓声を上げていたようだ。ホテルに着くとすぐに、日本側から古川知事ら官民の有力者と、朝鮮側から女優赫、曹晩植らの有力者を呼

び付けて会談し、日本の行政権の接收など多くの事項が決定された。このあと放送、通信、鉄道、工場など主要施設は逐次接收され、また新聞、ラジオもハンブル語となった。旧軍人、軍属の家族は、三合里廠舎や、彌勒洞、秋乙の兵舎や官舎に收容された。その後旧軍人は、シベリア送りとなった。

日鮮滿の通信路分断

終戦直後、元山に上陸したソ連軍は、ポツダム宣言で取り決めた、南北分断線（いわゆる三八度線）近くの諸都市に二十五日には進出した。また、二十六日未明には、開城の北六十キロメートルにある南川中継所にソ連兵が侵入して、市外ケーブルと局内装置間にある保安機器を撤去した。そのため、日・鮮・滿を結ぶ通信路の全市外回線は不通となった。その後、ここがソ連軍通信部隊の駐屯地となり、社員家族全員は退去させられることとなり、近くの日本人経営のリンゴ園に移った。

一方、平壤中継所は、九月一日にその数日前に発足したばかりの、平安南道人民政治委員会に接收され

た。そして、電力技術者で朝鮮人の金雲天氏が所長となった。また、終戦後すぐに姿を消した、通信技術者でやはり朝鮮人の金城氏は、戦前からひそかに独立運動に参加していたのか、新政権の通信関係の責任者になったと聞いた。

終戦直後の平壤

釜山から帰局すると、社員、家族は荷物をまとめていつでも帰国できる準備をしていた。私も急いでリュックサックを作り準備した。しかし、その後帰国のめどは立たなかった。三カ月の出張中に、ほとんどの社員は召集されていた。残った者も出張、転勤と外部に出ていて、残った女子技術員も事態の急変で親元に帰宅させられたりして少なくなっていた。

中継所は船橋里より更に郊外で、付近には日本人はおらず、まさに孤立状態であって、一抹の不安を禁じ得なかった。

八月十八日に、平壤日本人会が結成されて、長老の山下氏が片道六キロメートルもある道を歩いて週一回の会議に出席して、刻々と変わる情勢を伝えてくれ

た。また、所内が中・短波ラジオも利用し、更に近所の朝鮮の人たちからもいろいろな情報を聞き、その把握に努めた。

独立・解放に沸く

大同江対岸の平壤中心街は、釜山と同様に独立の喜びが全市内にみなぎり、ソ連軍を迎えて更に盛り上がりを見せていた。昼も夜も大小の赤旗を振り回し、楽隊を先頭に立てて市民、学生の行進が続ぎ、大同江の堤防上には近隣から市内に向かう赤旗の列が続いた。

また一方では、刑務所から終戦前に収監されていた政治、経済、一般の受刑犯が釈放され、付近の工場に動員されていた囚人も解放された。それらの人たちは、報復的に警察、特高、司法、物質の配給係などの関係者に対する検挙、拘留、投獄、拷問などを行っていて、船橋里警察署からは、連日のごとくに悲鳴が聞かれたと伝えられた。また、ソ連軍の進駐に伴い、悪質なソ連兵による強盗、暴行、強姦、略奪、殺人などが続発していた。社員でも市内に外出した折に、暴行を受けた者も多かった。

旧日本兵の南下

中継所前の国道を南朝鮮を目指して南下する武装解除後の日本軍兵士が、強力の^{ブリキ}のように荷物を背負って、炎天下の中を連日のように通っていた。どのくらいの人数が数え切れないくらいだ。中には馬に乗って南下する軍人もいた。しかし途中中の集落の住民が、保安隊と称する組織を作り、荷物検査と称して、着ているものと食糧以外は全部没収した。その真新しい軍服や軍靴、下着、靴下などは、自分たち同士で分けていたようだ。これらの日本兵が、無事に南朝鮮地区に着いたかどうかは疑問が残る。また、小学校時代の同級生で平壤の航空隊の通信兵だった者が、戦後すぐに隊長ら数人と共に飛行機で蔚山に飛び、無事に日本に帰ったという話を後に聞いた。

ソ連軍の穀物大輸送

九月の初頭になると、連日中継所前の国道を大型トラック十数台が砂塵を巻き上げて通過していったが、見ると荷台には穀物を山の様に積んでいて、使役らしい日本兵が乗っていた。南川方面の陸軍糧秣倉庫から

運んでいて、これは秋乙、三合里収容所の人たちの食糧とのことだった。驚いたことにそのトラックの車上に、召集で入隊した会社の同僚がいた。大変な苦勞をしている様子だった。

疎開物資の略奪

九月中旬のある日、薄暗くなったころ、突然に大型トラックが我々の任んでいる独身寮の玄関に乗り付けて、ソ連兵が数人降りてきて、どやどやと旧食堂に入ってきた。旧食堂は倉庫として使用していて、その中には布団、鍋、鎌などの日用品が疎開物品として保管してあった。ドアには鍵が掛けてあり、人民委員会 の封印もしてあったが、その鍵を壊し数回に分けて運び出し、全部持ち去ってしまった。半長靴を履いた女性隊長が指揮していた。

新平壤製造所大爆発

九月十六日夜、突然大爆発音と爆風が襲い、寮の窓が揺れた。驚いた皆は部屋から飛び出すやら、窓から飛び降りるやらで大慌てだった。朝鮮では地震がないから何事かと周囲を見渡すと、東の方向が変色してい

るようだった。あとで知ったことだったが、日本軍の補給廠のあった分廠で、斧山面填棄所といって、岩山を囚人たちを使ってくり抜いて作った、弾薬類の保管所だった。ところが何らかの事故で爆発を起こしたとのことだった。

社員的一家姿を消す

その爆発事故の三日前の夜、突然二歳の男の子と、四〇度の高熱を出していた奥さんを連れて、社員一家が姿を消した。出て行く姿を見た住民が保安隊に通報した。しばらくして着剣した保安隊員が来た。何事かと大勢の住民が押しかけて来た局舎の内外は騒然となった。姿を消した社員の社宅を調べたあと、各人の社宅も調べられたが、リュックサックなどに荷物が多とめてあったので、集団で逃げ出す準備と疑われた。調べの結果、騒ぎを起こしたということで、明日から勤勞奉仕をせよということになった。翌朝から三井里派出所の掃除をすることになった。

勤勞奉仕といえは、新政権下の六月に大雨が降り続き、大同江やその支流が氾濫したことがあった。船橋

里地域も浸水したが、中継所は設計上高い所にあったので、周りが浸水して朝鮮住民が多数避難して来たことがあった。このあと、牡丹台近くの堤防の補強工事にも動員されたことがあった。

派出所の清掃のあと、今度は平壤航空無線受信所の守備隊のいた三角兵舎の取り壊しをすることになった。ボールなどを使つての作業だったが、年末ごろまで続いた。このときに、屋根に用いたトタンが滑り落ちてきて私に当たり、人差し指を切り、かなりの出血であったが、その傷跡は五十年たつても消えなかつた。

所長姿を消す

社員一家の失踪事件から日ならずして、所長が姿を消した。単身赴任の所長は、独身寮二階の十帖の客間に移り住んでいた。十月の中ごろ、所長が忽然として姿を消した。この間、何度か保安署に呼ばれて不安を感じていたのであろう。私は隣の部屋で寝ていたが、朝起きると、所長の部屋の障子が開いていた。起きたあとも依然として姿を見せないで部屋を覗くと、布

団は敷きつ放しで、掛布団はまくれて、敷布団の上には寝間着が脱ぎつ放しで物音もせず、荒らされた形跡も無く、拘引されたとも考えにくかった。気になるのは、二日ほど前に日本軍の人が訪れて来たことであつた。彼は、北朝鮮東北部と国境を接する満州地区から鴨緑江を渡り、約一カ月かかってここ平壤にたどり着き、所長のところに立寄り、話をしてている。この人と一緒に南朝鮮へ脱出したということも考えられるが、推測の域を出ない。今日に至るまで、所長の生死はもちろん所在も不明である。このことがあつてから、二階の個室で起居していた独身者三人は、階下の山下氏の部屋に移つた。これで二階は全部空室となつた。しばらくすると、二階には朝鮮の若者たちが集まり、連日がやがや、どたばたの騒ぎが始まり、天井が落ちるのではないかと心配するくらいだつた。

後日談として、六年前に某新聞に娘さん（終戦時三歳）の投稿があつたが、その内容から察するに、所長のことであると思ひすぐ電話して、後日その兄弟姉妹と東京で会つて詳しい話をした。

チスチャコフ司令官来訪

十月下旬の暖かい日に、突然中継所の玄関に三台のジープが横付けになり、金ピカの肩章の付いた、がっちりとした体格の将官たちの一行が降りた。朝鮮駐留軍司令官チスチャコフ大将の一行だった。日本人らしい通訳を伴い、局内施設を見学したいとのこと、先輩の社員が応対し、機械室から順次各種装置の説明をしてから、電力室、電池室と一時間くらいで回って、引き揚げた。その後、ソ連軍将校がたびたび来て調査をしたり、測定器なども借りに来た。

このころ、満州では国民党軍と中国共産党軍との戦闘が展開していた。通信回線は、南朝鮮方面は不通だったが、平壤と安東間の通話は可能で、ソ連将校がたびたび訪れ通話していた。しかし国共内戦の激化と拡大で、年末ごろには不通となっていました。この時期、ソ連軍通信部隊も通信回線の掌握に努めていたように、平壤の北約六十キロメートルの肅川中継所の社員や平壤の南約六十キロメートルの沙里院中継所の社員たちは、ソ連軍通信隊の命令で、それぞれ隣接の中

継所にソ連兵に警護されて車で赴いたが、通訳を同行しなかったので要領を得ず、部隊間の連絡も無く成果は無かった。

駐在ソ連兵

司令官の来訪後、三人の通信兵が小使室に駐在することになった。彼らとは、何度か出会ううちに、お互いに仲良くなり、小使室に遊びに行くようになった。小使室は、台所と三畳間と押入があるだけだったが、壁には大きな文字のスローガンが貼ってある。台所の電熱器の上に大きなアルマイトの鍋をのせて、玄米を炊いたり、肉を入れたスープを作ったりしていた。常時部屋にいるだけなので、暇をもて余していたようだった。ときどき、マンドリン自動小銃を空に向けて撃っていた。私たちも暇だったので、訪れては身振り手振りでいろいろなことを聞き、相互に言葉を習った。隊長は特に熱心で、社宅まで何回も来ては日本語を習っていた。あるとき、本を読んでいたのを覗いてみると、I I E / R (オームの法則) があったので電気の本を読んでいることが分かった。また彼らの食糧

は、週に一度、馬車で運んでくるのだが、これが殺伐とした当時にあってなんとも牧歌的な風情で、心の休まる一コマだった。

ソ連軍野戦銀行

戦前、朝鮮では日本銀行と朝鮮銀行とで印刷された紙幣が使用されていたが、戦後、北朝鮮では朝鮮銀行発行の紙幣しか通用しなくなった。そのため、三八度を越えて南朝鮮に行き、あるレートで両替をして商売をしていた。現に中継所の隣にいた青年もたびたび行っていたので、彼から南朝鮮の話など聞くことができた。

十月に、南門町の電車通りに面した旧安田銀行跡にソ連軍野戦銀行が開設されて、軍票が発行された。百円札（桃色）、十円札（緑色）、五円札（茶色）の三種類であった。そしてソ連の軍人、家族などが各地の青空市場などで使用を始め、一般市民に軍票が流通するにつれて物価は上昇した。船橋里市場での米の値段は、終戦直後には五十円から七十円だったが、十月には二百円、十二月には三百円、昭和二十一年二月にな

ると四百円とインフレ傾向が進んだ。

市内で働く

勤労奉仕は、寒さの増した年末ごろまで続き、この間の食糧事情は、夏に所内の畑で作り大豊作だった大きなカボチャとトウモロコシの備蓄と、無線局の守備隊が引き揚げるときにもらい受けた米などでのいできた。終戦になって本社との連絡は途絶えたが、事務担当者がすぐに社員分の給料を銀行から下ろしたので、大助かりした。年の暮れが近づくも、引揚げ問題は依然として見通しはなかった。この先のことを考え、日本人会の斡旋で働くことにした。

最初は、船橋里変電所のトランスを囲む防空壁の取壊し作業であったが、零下十度くらいで土がコンクリートのように凍っていて、つるはしで打ち下ろすも、跳ね返って手に負えず一日でやめた。

次は、大同江駅近くの日本穀産という所で、雑穀の入った吠かまの運搬作業だったが、重くて運べずこれもやめてしまった。

寒さは一段と増してきた。今度はマセック（日本の

豆炭と同種で三倍位大きい)工場で、貨車に積まれてきた粉炭を、トロッコで工場内に運び込み、機械に入れると出口からマセックになって出てくるのだ。そして出口の袋に詰めて一連の作業は完了する。零下十数度で、火の気もなく寒さに震えたし、工場内には粉煙が舞い顔も体も真っ黒になり風呂も無いので、ここも数日でやめた。いずれも同期生と行動を共にした。また、どこの工場も朝鮮人労働者は見当たらず、釈放の喜びで姿を消したようだった。このあと厳冬ということもあり、しばらくは市街地や郊外の秋乙の方まで、何の目的もなく歩き回って過ごしていた。

二月に入り、船橋里の木材工業所で働くことになった。満州からの避難者の花田、宮城の両氏と同期生との四人で、毎日、長さ七メートルくらい、太さ三センチメートルくらい丸太二百本ほどを、二人で大きな引き鋸で六尺と九尺に切り、板や角材を製材した。何分、全員がずぶの素人なので「ガラン、ガラン」と左右に揺れながら回る大きな丸鋸に丸太を突っ込むと、定規を当ててはいるが、板も角材も手前と先では

厚みが違ってしまった、普通では商売にならないが、混乱で物騒な世の中なので弊を作る家が多く、半年もたずに全部売りつくした。丸太の無くなった跡は空き地となった。雇主の金さんは、仕事には一切口出しせず任せきりだったので、気持ちよく働いた。ときには大同江岸にある平壤名物の冷麺店に連れて行ってくれた。また、金さんは常に綺麗な朝鮮衣裳のチョゴリ(上衣)やバジ(袴)を着ていたが、ツルマギ(羽織)などを着て止装することもあった。

木工所には、毎日三キロメートルほど歩いて通った。帰りには決まって船橋里露天市場に立ち寄るのが楽しみだった。戦後になって、米の配給制度が無くなったが、この市場はいち早く開かれて、米も真っ白いの中から玄米まで数種類も並び、粟や高粱コウリヤンなどの穀物類から衣類などまで売っていて、ソ連の軍人や家族も買いに来ていた。木工所は一日五円の日給だったが、よく朝鮮餅やコップに入った向日葵の種を買った。向日葵の種は、口の中で種を割り、皮をポイと吐き出す感触が面白かった。ここでは半年くらい働いた

が、丸太に手を挟み、鍼灸院で針刺し治療を受けると
いうハプニングもあった。

製材作業も終わり次の仕事は黒鉛の塊を電動石うす
で碎き、ふるいにかけて出てきた粉末を吠に入れる仕
事で、マセック工場と同じで黒い粉末が舞い、目、
鼻、耳など体全体が真っ黒になった。風呂はあった
が、これは数日にしてやめた。

八月になり、農家の畑の薬取りをすることになった
が、日給は無くその代わりに昼食が出るということ
だった。「サバリ」という真鍮しんちゆうのどんぶりに山盛の粟
飯、おかずは鯖サバの煮付けだった。畑は大同江駅の近く
で、ホミという草取用具を使うのだが、これが重くて
手首が痛くなったのを覚えている。ここでは、南朝鮮
へ脱出する前日まで働いていた。

市辺里ルートで脱出

米・ソの朝鮮問題を巡る話し合いは一向に解決のめ
どが立たず、平壤日本人会では、この夏の時期を逸し
てはまた冬を迎えることになり、更に多くの死者が出
ると判断して、幾つかの脱出ルートを決めた。また、

京城の日本人世話会でも北朝鮮の各地に派遣員をひそ
かに送り込んで、救援体制をとった。

昭和二十一年八月十日の早朝、残った社員、家族十
四人は、駐屯ソ連軍隊長の見送るなかを「ドスビダー
ニャ」（サヨウナラ）を繰り返しながら、手を振って
別れを惜しんだ。懐しい中継所をあとにして、市辺里
ルート二二〇キロメートルの旅に出発した。国道は取
締りが厳しいと聞いていたので、出発後すぐに側道に
入り、三登からの南下を目指した。

リュックサックの荷物は、わずかな衣類と米、それ
に三省堂の英和辞典と国語辞典だった。手に傘を持っ
ての出立だった。途中では、続々と南下を続ける大小
の避難民集団に出会った。最初の夜は、街道脇の小学
校に泊まったが、他の避難民の集団も泊まっていた。
栗里では、トラックを雇って南下する集団が多く、町
はごった返していた。私たちも一台千五百円ほどを
払って他の組と一緒にトラックを雇い、それに乗って
数十キロメートルを走った。目的地の手前で追加料金を
請求された。金銭的に余裕の無い人たちは、全行程

を歩くしか方法は無かった。トラックを降りたあとは、牛車を一台二百円で雇い荷物を載せて、人は歩いた。難民と化した行列が延々と何十キロメートルも続いていった。途中で何回となく荷物検査があったが、幸いに天気には恵まれたが、照りつける夏の太陽のもと、木陰も無い所を歩くのは大変だった。気が狂った女性がいたが、どうすることもできなかった。川があれば、そこで体を洗った。歩いての避難行の三日目あたりで、社員の一人がマラリアにかかった。前夜、道端の雑木林で野宿したが、その際にかかったのである。三日おきに四〇度以上の熱が出るタイプで、そのときには全員が木陰で一服することとした。

札成江を渡って市辺里に着いた。ここには日本人会の詰所や休憩所、売店などもあったが、石の河原では、大勢の避難民が休んでいた。ここには、ソ連軍直轄の診療所が開設されていて、日本人の医師と看護婦がいて、続々と到着する避難民の治療にあたり、大勢の人々が助けられた。早速にマラリアの社員も注射をして、キニーネをもらった。私も帰国してから発病し

たが、このときにもらっていたキニーネを飲んで治った。ここでも保安隊による嚴重な荷物検査があった。

翌朝、朝食後に出発。ここからの記憶はどうしたとか全然残っていないが、三八度線の少し手前からの行動はよく覚えている。雑木林の中の空き地に、日本人会の指導で、続々と到着する集団が集まった。数百人がいたであろう。ここから隊列を組んで整然と行進した。間もなく三八度線を無事に通過した。その後、集団ごとに収容所に向かった。私たちは大きな木の下で休息し、明朝入所することになった。荷物をおろして休んでいると、朝鮮人が来て「ここはもう安全ですよ！」と声をかけてくれた。緊張の連続ですっかり疲れていたもので、ぐっすり寝入ってしまった。翌朝、目を覚ますと二人の荷物が無くなってしまった。盗まれてしまったのだ。

この日、DDTの洗礼を受けて入所した。収容所の周囲は米軍が整備していて、所内には軍用の大きな天幕が百張ほどあった。この日だけで約二千人あまりが入所して、既に収容されている人を加えると大変な人

数だった。食糧の確保が大変で、一日に粥食二杯くらいだったが、やっと安心した気持ちになった。

連日、続々と到着する避難民で超満員となり、三日ほどで列車に乗り、一〇〇キロメートルほど離れた議政府收容所に移された。この收容所には、会社の京城中継所で営徒動員で働いていた神谷氏が、京城日本人会の派遣員として勤務していることを聞いていたが、早速私たちを訪ねてくれて久しぶりに会い、喜びと安堵感を覚えたものだった。ここから引揚者として日本へ送還されることになっていた。この收容所には十日くらいいた。いよいよ日本へ帰る日がきた。有蓋貨車に乗り、普通では釜山まで七時間くらいのところを、二日間もかかって八月二十九日に到着、この日は埠頭の倉庫に泊められて、翌朝、米軍の「VO—一八号」輸送船に千数百人が乗船して、釜山を離れた。やっと博多港に着いたが、検疫のため湾内に十日ほど停泊し、やっと上陸できて松原收容所に入った。ここでもDDTの洗礼を受けて一泊した。翌日、白い毛布と日本円の千円、それに食糧切符が渡されて引揚列車に乗

り、一路東京に向かった。

九月十日無事に品川駅に着いた。着のみ着のまま、体には虱がたかり放題で、栄養失調の状態のまま一カ月に渡る避難行、まさに悪夢からの生還だった。

日本は五十余年にわたり平和な時代が続いているが、世界の各地ではまだまだ紛争の絶え間無く、難民も数多く悲惨な生活を強いられているのが現実である。一日も早く、人間の英知と努力で解決を望むこと切なるものがある。

引揚げ後、国際電気通信(株)に復職したが、しかしこの会社は国策会社だったので、昭和二十二年二月のGHQ指令で同年五月に解散し、通信施設と社員は当時の通信省に引き継がれた。その後の変遷の末に、現在のNTTとなった。私は東京の中野統制電話中継所に配属されたが、この局は無装荷方式による長距離通信の端局として、西日本方面を統轄し、戦後の市外回線の復興に寄与し、昭和四十年代まで全国の通信網を形成した。その後同軸方式となり、全国各地への自動即時による通話が可能となったが、その後更にケー

ブル方式となってデジタルによる通信に変わり、IT時代の幕開けを迎えた。

退職後も、全国のこの方式の変遷を調査して資料を作成していたが、ひょんなことからこの方式に関係のある東海大学にその資料を提供し、永久保存されることとなった。嬉しいことだ。さらに、最近は有志と協力してこれらに関する本も発行した。

私にとっては、あの激動した戦中、苦勞と悲惨な戦後を通じて身をもって体験した数々の出来事は、決して無駄では無かったと思っている。